

4月のさろんテーマ

人口増に手が届く離島、隠岐・海士町の内側

田嶋義介（島根県立大学名誉教授）

押し寄せる過疎化と財政難の中で、「最後尾から最先端へ」を掲げ、自立への道を歩み始めた約2400人の小さな町・海士町。その成功物語にはいくつもの“秘密”があった。島根県立大学名誉教授で、現場を何度も訪れたことがある田嶋さんに、外からはわかりにくい成功のカギのお話を一。

■町役場の給与カット

隠岐の島は本土から60キロ離れており、冬は海が荒れて船便が欠航する離島で、島前、島後の2つの島に分かれている。島後は合併話がまとまったが、島前は西ノ島町、海士町、知夫村の合併協議会の話が壊れて、合併できなかった。そこから、海士町は自立の道を歩みだした。

自立するには産業を興さねばならない。しかし金がない。金を生み出す手段が、2004年から始めた役場職員の給与カットだ。一般職5%、課長職20%、町長30%のカットで、一般職30%、課長40%、町長50%の年もあった。これで毎年2億円を生み出した。町税が2億円を下回る町には、凄い金額。スローガンは「最後尾から最先端へ」で、最後尾にいる自覚が行動につながった。

ゼミ学生に夏の合宿先を選ばせると3年連続で海士町を選んだ。町長や移住者の方々のまちおこしのお話を聞き、現場を見る。これが学生にとって大変な刺激になった。

その時に総務課長が言った給与カットの理由が、「住民の平均給与と比較すると役場職員は3割多くもらっていた。だからそれだけカットした」という話だ。

税金を払う人よりも、税金で生活している人が高い給与をもらう。そこに手をつけた。これが住民に役場との一体感を呼んで、住民も委員手当の返上を言い出したり、まちおこしのアイデアを出すようになった。これがサクセスストーリーの秘密のひとつではないかと思う。

■移住者厚遇と地場産業おこし

まちおこしには「若者・ばか者・よそ者」が必要というが、海士町はよそものを積極的に受け入れた。これには隠岐の島が流人の島で、よそ者に対する受け入れの土壌があるせいかもしれない。

まず商品開発研修生の募集。月15万円支給し、家賃1万円の1DKの住居を用意し、1年契約で更新が可能とした。10数年の間に18人が研修生に参加した。

次にIターンのための住宅の用意。新築39戸、リニュ

ーアル29戸、短期生活体験住宅8戸で合わせて84戸。子育て支援条例をつくる。結婚祝い金10万円、子ども一人目10万円、二人目20万円、三人目50万円と手厚い出産祝い金と、保育料第3子以降無料など。

また、島留学希望者には寮費補助、年4回里帰り交通費半額補助などを行い、今年は島外から55人の推薦入学があり、統廃合寸前だった高校が学級増になった。

地場産業おこしでは魚介の鮮度を落とさないCASシステムを導入し、1億4000万円の収益を上げ、上海、アメリカ、ドバイに白いか、岩ガキを輸出している。

隠岐牛をブランド化して肥育する起業家が現れた。企業の志のある人を応援する一口50万円の海士町ファンバンクをつくったが、支援してもらった起業家がきちんと返済し、投資待機者が100人もいるようになった。

■人口が増える

人口は一。自然減は続いているが、Iターン者が入ってきたことで、社会像が増え、13年度は総人口が増加した。とくに昨年は定員60人の保育園に82人の希望者が出て、町始まって以来の待機児童が出そうになった。あわてて定員増の措置を取り、待機児童発生は免れた。全国的に若年人口が減っているが、海士町は0~4歳、15~39歳の人口が増えている。よそものを受け入れる努力が実っている。

トヨタをやめて海士町に来た移住者が、「行き過ぎた資本主義に限界を感じ、海士町でみんながハッピーになる新しい仕事の仕組みを作りだして、世に問題提起したかった」と学生に言ったが、海士町の成功の潮流の底にはこうした背景があるのではないかと考えている。

【意見交換】

Q 島後は合併したのに、なぜ島前は合併しなかったのか。

A 合併してもメリットがないと思ったのではないかと。特例債だって自己資金が要る。あるいは政治的対立があったかもしれない。

Q キーマンは町長か。

A 町長と移住者。移住者がアイデアを出し、それをどんどん実現していった。なぜそれほど移住者を受け入れたのか。それは町民のなんとしてもこのまちを残したい危機感だったと海士町の話である。

（2015年4月21日開催）